

世界漢字学会第七屆年會參加報告

佐藤 信 弥

一 学会の概要

世界漢字学会は二〇一二年に創立された比較的新しい学会であり、韓国の慶星大学韓国漢字研究所内に事務局を置いている。学会ホームページのURLは <http://www.waccs.info/> である。韓国語のサイトだが、英語・中国語への切り替えもできる。

二〇一三年以降、年一回各国の持ち回りで国際学術研討会を開催している。「世界漢字学会」の名称通り各国の持ち回りで開催するのを特徴とする。学会の主催者は各回の開催機関及び世界漢字学会のほか、慶星大学韓国漢字研究所、中国の華東師範大学中国文字研究与应用中心である。本稿を執筆している二〇二〇年一月現在の会長は華東師範大学中国文字研究与应用中心の臧克和氏、秘書長は慶星大学韓国漢字研究所の河永三氏である。その他日本も含めて国別の会長と理事職も設けられている。

第七屆年會の正式名称は「世界漢字学会第七屆年會」で、面向世界的漢字研究重要領域及課題「國際學術研討會」で、開催機関は立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所（以下、立命館白川研）、日程は

二〇一九年九月二十六日（木）～三十日（月）である。開催期間は通常四日間のところ、今回は発表予定者が計八十三名と多数にのぼり（前回の第六屆は三十一名）、かつ一般向けの講演会を日程に組み入れた都合で、一日増えている。日韓関係が思わしくない折りであったが、学会の事務局スタッフを含めて多数の韓国人研究者が来日した。

二 参加受付

筆者はこの学会には第五屆年會より参加しているが、今回は自分が迎えられる側ではなく迎える側というのが前回までと異なっている。ただ、立命館白川研及びその母体となる立命館大学文学部中国文学・思想専攻では、スタッフとなる大学院生の数が不足している。そこで今回の幹事役大形徹氏の本務校大阪府立大学の大学院生及び立命館大学孔子学院の学生を中心にボランティアを募った。筆者自身も二十一日は受付対応に回った。また、念のため会期中は大形氏とともに参加者の宿泊所として指定されていたグランドプリンスホテル京都に泊まり込むことにした。

二十六日は受付登録日である。国内遠方、海外からの参加者がホテ



ホテルロビーにて。参加者に配布される資料一式をまとめたトートバッグ。

ルのロビーで受付登録をすることになっていった。他に三名ほどスタッフが配置されているので、知り合いの参加者に挨拶するぐらいしかやることがないだろうと気楽に構えていたら、いくつかトラブルが発生した。受付で中国語がわかるのが筆者しかいなかったのが、海外からの参加者の問い合わせが回ってくるのである。

たとえばある参加者は、事前の登録では受付前日の二十五日から宿泊することになっていたはずが、本人は二十六日から宿泊のつもりで来日し、ホテルのフロントでキャンセル料を請求されたということでも私のところに相談にきた。

また旧知の中国人研究者C氏（以下、トラブル絡みで出てくる人物は念のためイニシャル表記としておく）は夫婦で来日してツインの部屋を予約していたところ、どういうわけかC氏がD氏と相部屋で宿泊することになっていた。今回は宿泊料が高額となるので、相部屋での宿泊希望も受け付けていたのである。C氏夫妻に部屋を譲ってD氏が

一人部屋に移るとなると宿泊料が倍近くとなる。D氏がそれを受け入れてくれるだろうかと不安に思いつつ交渉に臨もうとしたところ、事情を知った中国人の参加者数名で既に部屋割りを再調整していた。もと相部屋の予定だったB氏が一人部屋に移り、かわりにD氏が相部屋に入ることの問題が解決したということであった。

今回の学会では中国のSNS 微信（WeChat）に学会専用のグループを作り、アカウントを持っていない参加者に登録してもらって連絡事項を通知するようにした。以下に見るようにこの微信が大活躍することになる。

三 学会一日目

前日の疲れを残したまま、ホテルからのリムジンで会場へと移動。午前中に記念写真撮影、開会式、主題発表を行った後、午後からグループ別発表へという流れは例年通りである。開会式では華東師範大学のグループが開発した金文識字システム「商周金文智能鏡」のデモンストラーションや、臧克和氏らが編纂した『秦漢六朝字形譜』全十五巻の贈呈式も行われた。

昼食会場は大学図書館（平井嘉一郎記念図書館）一階のカンファレンスルームである。図書館の二階に白川静の旧蔵書などを展示した「白川静文庫」が開設されているので、希望者に見てもらうことにした。これは当初の予定には入っていなかったが、本学で「漢字学」と名をついた学会をやる以上、参加者に見てもらわずに帰す手はないと考え、見学の機会を設けてもらうことにした。



学会参加者記念撮影

研究会関係者の発表題目は以下の通りである。

- 杉橋隆夫（立命館白川研所長）「京都、上賀茂神社収蔵『賀茂旧記』の史料価値与分析視角」
- 李強・大形徹（漢字学研究会代表）「推拿手法『掞』字考」
- 落合淳思「字形的変遷―從甲骨文到楷書」
- 草野友子「清華簡《封許之命》研究」
- 重信歩「關於江戸時代寺子屋教育所使用的漢字教材『小野篁歌字尽』」

午後からの発表

報告は、発表は十五分、コメントは五分、発表者が他の発表者のコメントーターもつとめるという形式である。発表言語は中国語か英語となる。今回は日本の開催ということ、日本人あるいは日本在住の研究者による発表が多かった。漢字学研

末次信行「筆写文字の系譜―以殷末周初以前の標準書体为中心」

出野文莉（張莉）「白川静博士在海内外の学術影響」

名和敏光「馬王堆漢墓帛書《陰陽五行》甲篇《雜占之二》《上朔》及《祭》

（一）綴合校釈」

松宮貴之「古代奴隸制与墨刑―分析文物演繹墨子思想的基底」

楊冰「有関《人間詞話》中的『我』的概念―以『有我之境』與『無我之境』為中心」

佐藤信弥「論清華簡《撰命》的『蒿京』与西周甲骨文中的『蒿』、『蒼京』」

筆者の発表では、コメントーターが古文字の分野の研究者ではなく、基本的な内容理解に関する質問が中心だったが、昨夜トラブルになりかけたD氏がフロアからの確にフォローしてくれた。後日微信でやりとりしてわかったのだが、D氏は私の発表内容に興味を持ち、学会論文集（予稿集）に掲載されている論文を事前によく読み込んでくれたというのであった。学会論文集は受付時に紙媒体として配布されるほか、学会開催の数日前にPDF版が学会ホームページよりダウンロードできるようになっていた (<http://www.wacgs.info/notice/view.php?idix=562&page=1&search=&find=>)

一方、私のコメント相手のM氏は、予稿集には要旨しか載せておらず、また実際の発表内容はそれとも少しずれたものであったので、的確なコメントができず、フロアにコメントを投げてしまった。発表終了後にそのことを謝りに行ったところ、本人も事前に論文を出さな

かったのは悪いと思っただけなので気にしていませんということであつた。更にM氏の所属先で二〇二〇年の十月に中国古文字研究会第二十三周年会の開催を予定しているということで、微信を通じてその申込書のWordファイルを頂いた。このように昨今の中国の研究者が参加する学会では微信が活用される機会が増えてきている。名刺交換の際にも、相手側は名刺を用意していませんということで、かわりに微信のアカウントを交換するというパターンがあつた。

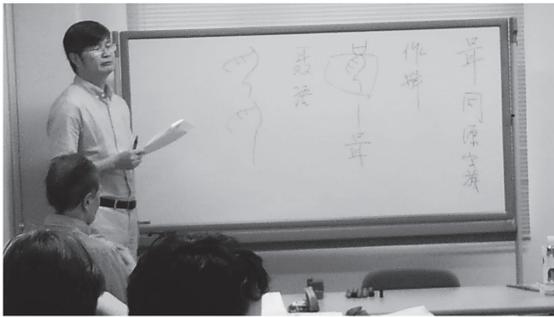
夕食はホテルに戻って立食形式で行われた。今回の学会では、筆者が吉林大学古籍研究所に留学していた際にお世話になった呉良宝氏が参加されていた。ほかにも数名同機関のOBが参加しており、吉林大学の同窓会のような雰囲気となつた。また、立命館白川研事務局の久保裕之氏のはからいにより展示されていた白川静の著書一式、特に当時刊行されたばかりであつた『白川静著作集別巻 続金文集』が人目を引きつけた。C氏は指導している大学院生が白川静の金文学を研究しているということで、私にこれは購入できるのかと問い合わせ、翌日の晩にタクシーでジュンク堂書店京都店に向かい、入手したということであつた。

四 学会二日目

この日は学会発表と一般向けの講演会「世界の漢字研究」との二部構成である。開会前に呉良宝先生のグループが青銅器の展示で知られる泉屋博古館と、中国学の専門書を販売する朋友書店に行きたいと言ひ出した。ともに立命館大学の付近にあると思ひ込んでいたようであ

るが、実際は両方とも立命館からは距離がある。翌日のエクスカージョンでも自由行動の時間は設けてあるのだが、他に予定があるということとで、それぞれの住所を書いたメモを手渡してタクシーで午前中の間に行ってもらふことにした（結局朋友書店の方には辿り着けなかつたようである）。

毎回研究発表は一日で終了するのであるが、今回は発表予定者が多数であつたため、一日ではさばききれなくなつた。二日目の目玉発表は、清華大学出土文献研究与保護中心の趙平安氏による「從“聿”字的積読談到甲骨文的“巴方”」である。趙平安氏は古文字分野の著名



趙平安氏の発表の様子



三校協力協定の署名式

な研究者である。これまでも日本の学会等に招聘されたことはあるが、いずれも事前にキャンセルされており、日本でその発表を聞けるのは珍しいということであった。内容は試論的なものであり、研究発表というよりは講義を聞いているような感じであった。

発表終了後に閉会式が行われ、その席上で立命館白川研、華東師範大学中国文字研究与应用中心、慶星大学韓国漢字研究所の三校協力協定の署名が行われた。

午後の講演会「世界の漢字研究」は立命館土曜講座の一環として行われた。立命館土曜講座は学内の研究所等が持ち回りで担当する企画である。今年白川研にその順番が回ってきたところを、今回の学会のプログラムとして組み込まれたという次第である。通常であれば立命館大学在籍者のみで講演を担当するのであるが、今回は特別に海外からの学会参加者に講演して頂くことになった。使用言語は日本語あるいは中国語で、無線レシーバーを介した日中同時通訳が行われた。司会、講演担当者及び講演題目は以下の通りである。

張莉（大阪教育大学准教授、立命館白川研客員研究員）…司会

朱歧祥（台湾・東海大学教授）「漢字と文化」

何莫邪（Christoph Harbsmeier）（ノルウェー・コペンハーゲン大学教授）「古代中国の言語学の方法論を探る」

阮俊強（ベトナム・越南社会科学翰林院漢喃研究院教授）「ベトナムの儒教の漢字入門書研究」

大形徹（大阪府立大学教授、立命館大学客員教授）「国号「日本」の「本」

はどのような意味か」

河永三（韓国・慶星大学教授、韓国漢字研究所長）「東アジアにおける文字を中心とする文明の根源」

臧克和（中国・華東師範大学終身教授、世界漢字学会会長）「邪馬臺か、それとも「邪馬臺」か？—漢字の海上伝播の道筋と言語文化を越えた漢字の歴史考古学問題を考える」

臧克和氏は日本のテレビ局から邪馬台国論争に関して取材を受けたことがあり、同氏の発表テーマもそれに関するものである。また大形徹氏の「国号「日本」の「本」はどのような意味か」も、臧克和氏の発表にテーマを合わせたものである。講演は中国語あるいは日本語で行われ、無線による同時通訳付きである。ただ、一人あたりの講演時間が二十五分と短く、いずれも消化不良気味となったのが残念であった。なお、それぞれの講演の内容については、本号の「世界の漢字研究」欄を参照。

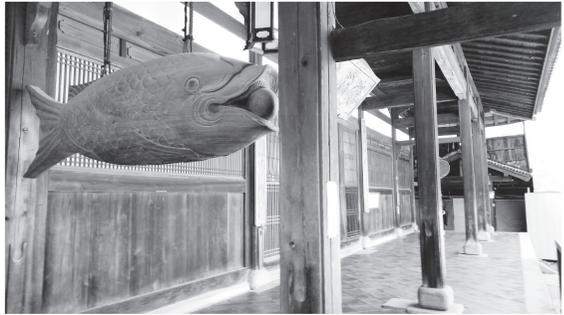
五 エクスカーション

エクスカーションは黄檗山宝蔵院↓万福寺↓円山公園内の和食料理屋で昼食↓漢検漢字博物館↓自由行動というスケジュールであった。

宝蔵院では、江戸時代前期に黄檗宗の鉄限道光が開版した鉄眼版一切経の版木約六万枚が所狭しと収蔵されている。漢字学の学会にふさわしい場所ということで、大形徹氏の提案で見学することとなった。万福寺は黄檗宗の大本山で、伽藍配置や仏像の様式などに中国の様式



黄檗山宝蔵院内部



万福寺のシンボル開槌（木魚）

を取り入れているのが特徴である。黄檗宗の開祖隠元隆琦は明末清初の時期に中国から渡来した禅僧である。筆者は万福寺には二、三度来観したことがあるが、宝蔵院は初めてである。

漢検漢字博物館 (<https://www.kanjimuseum.kyoto/>) は二〇一六年に日本漢字能力検定協会によって開設された施設で、今回の学会で同協会の協力を得たということでコースに組み込まれた。児童やファミリー向けの学習施設で、資料性の高い展示物はそれほどないが、二階の図書館では図録類や専門書も配架されているということで、参加者の注目を集めていた。

その後は自由行動である。博物館が八坂神社前に位置するという絶好のロケーションから、参加者に配布された学会プログラムでは、四条でのショッピング、バスに乗って清水寺に観光などのプランが提案されていた。筆者はこれに泉屋博物館 (<https://www.sen-oku.or.jp/>) の見学というプランを追加させた。折り良く「中国青銅器の時代」展を開催中であった。筆者もこちらを見学し、やはり学会参加者とは何か顔を合わせるようになった。

六 おわりに

次回の世界漢字学会第八周年会は二〇二一年十月二十八日～十一月一日に韓国ソウルの延世大学で開催予定である。本稿執筆現在（二〇二〇年五月）、「コロナ禍」で開催が流動的な状況であるが、今回の学会で示されたように、学会は研究者が見識を深めあう貴重な機会である。会期までに状況が改善されることを願うばかりである。

※ 本稿は同題で『中国史料研究会会報』第四号（二〇一九年十一月）に発表した報告を加筆修正したものである。

（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所 客員研究員）